

## 読んでもためにならない学問のすすめ

石 村 直 之

敬愛する社会学部M教授からの原稿依頼は「新入生のための学問のすすめ」を、とのことであった。新人教官が書くべきもの、だそうである。共通一次試験施行後、私もその世代の一員だが、大学の偏差値による序列が受験業界よりはっきりと出され、それにより学生の没個性

か」と冗談半分で言う、「あ、それいいね」とあっさりした返答。いささか無茶苦茶な動機ではあるが、以下の言葉「専門バカでないのはただのバカだ」をもとに雑文を綴らせて頂く。考えてみると、意外に今の時代に問題を投げかける言葉である。

化も進んだとよく言われる。しかし、確実に何パーセントかはび一橋大学に来たかった者、というのが実感としてある。理系教官、すなわち一橋出身ではなく、学内のこともまだよく判らない私は、今の居心地を大変よいものと感じているとはいえ、まだ一橋に対する強い想い入れを持つまでには至らない。学生に対して一体何を書かせたいのかな、と思いつつ「そうですね、では専門バカでないのはただのバカだ、とでも書いてみましょう

語句の初出は大学紛争華やかなりし一九六〇年代中頃のようにある。当時学生達は既存のアカデミズム解体を目指したのかどうなのか、大学教授達のいわゆるタコツポに閉じ籠った専門性についても排撃していたようだ。その時代の記憶はなく、それら事柄を研究している身でもないの、今となってはそれら攻撃の当否はよく分からぬ。世界的な数学者で、当時東京大学理学部教授であった小平邦彦先生が、理学部教授会からか何かのアンケ

トにならぬにげなく答えた語句が最初らしい。それは東大理学部教授達の学生に対するメッセージとなる。

これら大学紛争、人によっては闘争かも知れないが、により確かに大学は幾分か変わったようである。少なくともその後、大衆化への道が大きく開かれたことは事実であろう。教官の方にも当然変化はあらわれ、現在では「俺は専門バカだ」と胸をはって広言できる者は少ない、と思う。象牙の塔に棲息するお固い学者、では通用しないのである。

さて実はこの数年、大きな変革が静かに進行して、もしかするとその影響はかの時代の激動のもたらしたのより深い、と言えはどう思われるであろうか。事の成り行きとして学生達に対する変化はおとぎれつつあるのだが、今回の大学改革の主体は学生でなく大学教官自身の方である。もしかすると、昔行動を起こした者達と同一人物達であるかもしれないが、これは半分冗談である。

現在の大学改革とは大学院重点化のことを意味する。俗っぽく言えば、大学院を昔の意味での大学にしよう、さらに進んで言えば大学院を大衆化しようということである。学部教育四年間を終えた後に、多くの人達に修士

課程の二年間、さらには博士課程へ進んでもらおう、という制度変更である。既に一九八〇年代頃より理科系では、学問の分化専門化が著しく、学部四年間では到底先端部分に至らず修士課程でやっとその一端を垣間見る、という状態であった。卒業論文はなく半分程度の人数が大学院に進学する、となっていたところもあった。そのため、最初から大学院と学部とを併せた組織にしよう、という考え方も提出されていた。

いろいろと紆余曲折はあったようだが、五年程前からこれら理系学部の動きに文系各学部も同調し、それならば大学院を主にすれば良いではないか、という方針に落ち着いた。文部省の方の政策変更も適確に作用したようだ。現在いくつかの大学で、何々研究科となっているのがこれに相当する。

この重点化の表面にあらわれる特徴はいくつかある。まず大学そのものにとっては、大学院の重点化が認められる大学とそうでない大学ということで序列復活である。もちろんそう広言されているわけではないが実際の感覚はそうである。今のところ旧帝大プラスアルファが重点化を認められている。一橋大学も含まれている。教官に

とってのメリットは、ステイタスの上昇のみならず予算の増額がある。重点化は大学院生数の増加と一体で、教官は院生の増加によりますます忙しくなってくるとはいうものの、それに伴い予算があるいは大学院手当による給料が違ってくる。ここまでは重点化のまあ良い面である。しかし学生にとってこの変革は何を意味するのか。ここからが問題である。

まず、高校での教育内容は以前と比べて少量になりしかも易しくなっていることは知っているであろう。ゆとりの教育というわけである。当然のことながら大学における講義内容も、特に教養教育は易しくなっている。十年前ならおそらく既知として取り扱ってよいことから解説する必要が出てきた。このような状況と大学院の重点化、つまり多くの学生は少なくとも大学院修士課程に進む、という前提とが重なった。ひとことでは、今まではなら学部四年間でこなされてきた講義内容を修士までの六年間かけて行おう、ということになる。実質水で薄めたようなものだ。

大学に入学したばかりで大学院のことなど何も考えていない、と言われるかもしれないが、事はそう文句ばかり

り言っている状態でないかも知れない。実質水で薄めたようなものだと書いたが、その埋め合わせではないだろうが表裏一体となったものに、科目選択自由度の増大とさらには飛び級の制度ができた。後者は学部三年から大学院入学を可能にするもので、既に多くの大学で例がある。大学院も合計で三年間在籍すれば博士学位の修得が可能なのだが、これについてはここでは触れない。とにかく多くの決定事項を学生に預けた格好である。良く言えば学生たちの自主性にまかせよう、ということなのだ。

就職についても先行き不透明なところがある。理系においては近来、学部卒業者よりも修士課程修了者の方が各人の希望に適った職を得る可能性が高い。もちろん修士の人数そのものが増えているから以前程のご利益はないが、大学院修士の方がむしろ金の卵と看做されている。しかし文系においてはどうかであろうか。たとえば学部四年間で昔の教養課程程度の内容しか仕込まれていないとしても、では直ぐさま修士課程の方が就職に有利、となるであろうか。いまひとつ疑問である。レベルの問題もある。哲学者廣松渉の文章に、「読書量は、しかし、文学

部学生の標準ぐらいには達していたかと思う。一日平均七百頁、つまり、毎月二万頁はほぼ読破していたつもりである。」とあるが、今ではこれがスタンダードなのかどうか。ともあれ、自主性に任されているということは、同時にしろもろのリスクも自分で背負うことを意味している、とは認識しておいてよい。

では大学四年間とは何なのであろう。ここにおいて「専門バカでないのはただのバカだ」という言葉が生きてくるように思う。不確実性の高い動きの激しい時代においては、結局は自分個人として何をどのようにとどこまで深く考えているのかあるいは身につけているのか、が重要となるであろう。要するに何かの専門バカにならないければ仕方がないように思う。この場合、何かのという

のは必ずしも学問分野のみを意味しているわけではない。スポーツに打ち込むのはもちろん結構。自堕落な生活を究めるのもひとつか。ただし責任その他もろもろ発生するであろうことも負うわけだが。

ことの内容は私自身にも及ぶので、学問を指向する人達に少し。大学院重点化はアメリカでの動きの後追いという面が強く、アメリカは例のごとく物量主義である。すなわち大学での開講科目においてもいろいろなもの幅広く並べようとする。一橋においても各分野からスペクトルの広い講義群があると信じる。これらさまざまな設備等を上手に利用して、進んで何かの専門バカになる人材が輩出することを期待する。

(一橋大学助教)